

# 高校生の韓国語学習地図を 塗り変えたクムホ・アジアナ杯 「話してみよう韓国語」高校生大会

TJFでは、日本国内で「韓国語」「朝鮮語」「ハングル」などと呼ばれている隣国のことばを韓国朝鮮語と総称していますが、本号では、「話してみよう韓国語」地方大会やクムホ・アジアナ杯高校生大会で使用された名称にならって韓国語と表記します。

## これまでのTJFの韓国語教育プログラム

TJFの韓国語教育プログラムは、高校や大学等における韓国語教育の現状調査、韓国語教員のための研修、高校教員のネットワーク活動への支援、高校生のための教材開発に対する助成・協力を中心に展開してきました。また、これらと併行して、高校生の韓国語学習の動機づけを高め、言語習得および文化理解を深めてもらうために、学習者である高校生向けのプログラムにも協力してきました。高校生が韓国語を実際に運用したり、韓国でさまざまな体験をしたり、韓国の同世代と交流したりするなど、これらのプログラムは成果を上げてきました。これらはすべて学校教育のなかの韓国語学習者を対象としてきました。

その一つ、「韓国語を学んで韓国に行こう」プログラム(2001～05年、韓国国際教育振興院主催。TJFは事務局を担当)は、日本の高校で韓国語を学ぶ高校生と教師などを対象とするソウルでの5日間の語学研修事業でした。もう一つは、初級者を対象とするスピーチコンテスト「話してみよう韓国語」(2003年～、駐日韓国文化院ほか主催。TJFは企画、運営に参加)で、TJFは高校生部門を応援してきました。「話してみよう韓国語」は、東京と大阪で始まり、2005年以後は、鳥取、青森、鹿児島、熊本と、しだいに広がっています。「話してみよう韓国語」では、初級レベルの学習者でも楽しく参加できるように、スキット部門やKポップ部門を設けました。これら高校の韓国語学習の段階に見合った部門を設けたのは、高校生に楽しく学んでもらいたいからでした。「話してみよう韓国語」地方大会には高校生の応募者が多く、東京・大阪大会では高校生が全応募者の過半数を占め、中心的な役割を果たしています。一方で、これら地方大会を安定的に実施するための財政基盤の強化と高校生部門を設けられない地方大会への高校生の参加促進が大きな課題になっていました。さらに、ある程度韓国語

を学んだ高校生の語学力をさらに高めたいという要求もありました。

## 全国の高校生を対象とした大会の開催

2007年10月、クムホ・アジアナ・グループのパク・サング会長が、日本の青少年のための韓国語スピーチコンテストを開催する意向を表明しました。クムホ・アジアナ・グループは、クムホ・タイヤやアジアナ航空などの企業を有する韓国の企業グループで、クムホ・アジアナ文化財団を運営し、アジアにおける若い世代の韓国語学習を奨励するため、2006年から中国で、2008年からはベトナムで、大学生を対象とするスピーチコンテストを開催しています。

TJFと駐日韓国文化院は、1997年以来、日本の高校の韓国語教育に関する実態調査や韓国語教師のための研修プログラム、韓国語学習をめぐる公開フォーラムなどの事業実績をもっていたことから、クムホ・アジアナ側からアプローチがあり、最終的にTJFが事務局を務めることになりました。

当初、韓国側は韓国語を流暢に話す高校生のスピーチ大会となることを期待していました。しかし、韓国語の授業が1～2コマにすぎない高校が圧倒的に多い現状を考えると、その期待と韓国語学習者の実態との間には大きなギャップがありました。すでにスピーチ大会を実施している中国やベトナムでは、韓国語学習と就職が直結しているなど、日本での韓国語学習をめぐる状況とは異なっており、そのことを韓国側に理解してもらうのは、容易ではありませんでした。

調整を進めていくなかで、まず「話してみよう韓国語」地方大会との連携を模索し、韓国語スピーチのほかに、韓国語スキット部門を設けることに合意しました。一方で、韓国語教育の実施校だけを対象にするのではなく、広く全国の高校に参加を呼びかけるという課題もありました。そして、現在は韓国語を学んでいなくても、韓国語あるいは韓国の文化に関心をもつ高校生が広く大会に参加できるようにするため、日本語エッセイ部門を設けることにしました。

また、より多くの高校生に参加してもらうために副賞の内容を充実させました。韓国語ができる、できないにかかわら



ず、入賞者全員が参加できる韓国研修ツアーと、各部門の最優秀賞受賞者が受講できる3週間の語学研修を副賞としました。語学力より先に、韓国や韓国語に親しみをもってもらうという企画だったともいえるでしょう。

### 高校の授業以外の場で韓国語を学ぶ高校生

こうして2008年3月から5月にかけて募集した第1回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会(以下、クムホ・アジアナ杯高校生大会)に応募した高校生は494名に上りました。韓国語スキット部門には115組230名、韓国語スピーチ部門には65名、日本語エッセイ部門には199名の応募がありました。学校で学ぶ生徒だけを対象にした従来の事業では捕捉できなかった韓国語や韓国文化に関心をもつ高校生を一気に引き寄せることができたのです。約500名の応募者が在籍する全国140校の中で韓国語授業を導入している高校は4割に過ぎません。残り6割の高校では、授業として韓国語を学ぶ機会はほとんどありません。TJFが実施してきた高校や大学等における韓国語教育に関する現状調査の結果や韓国語教員のネットワークも活用しましたが、これまで韓

国語の授業をほとんど導入したことの少ない進学校も少なからず含まれています。特に入賞者にその傾向が顕著でした。

クムホ・アジアナ杯高校生大会は、韓国語教育界にとって画期的なプログラムでした。学校教育以外で韓国語を学ぶ高校生が少なからずいること、韓国語や韓国に関心を抱いている高校生が多様であることが明らかになったことで、学校教育だけに注目していた関連機関や団体に大きな問題提起を行うことができました。学校教育の外で独習している生徒は、学習意欲ばかりでなく、問題意識も高いこと、さらに学ぶ理由もさまざまなことがわかりました。

母親の母語が韓国語で、その影響で学んだ者、親の仕事の関係などで韓国に何年か住んでいた者、在日ゆえに受けたいじめにもめげず韓国語を学んだ者、Kポップや韓国映画が好きで学んだ者、英語圏の短期留学がきっかけで学んだ者など、さまざまな高校生の姿が浮かびあがりました。彼らが韓国語や隣国の文化に関心をもったきっかけの一つが「韓流」であり、彼らの母親が仲介役を果たしている場合も少なくありません。この意味において「韓流」は一過性のブームでなかったということもできます。

## 第1回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会の概要

参加資格	本選時に日本の高等学校またはそれに準ずる専修学校や各種学校、あるいは高等専門学校の1～3年次に在籍する人で20歳未満の人。ただし、育った環境において主な言語が韓国語で、最も楽に話せる言語の一つである人は除く。
募集期間	2008年3月下旬～5月7日 (アジアナ航空のウェブサイトクムホ・アジアナ杯高校生大会のページを開設。全国の高校5,400校と関連団体・機関にチラシ、ポスターを送付)
応募要項	二人で演じる韓国語スキット部門は、課題の韓国語スキット台本を吹き込んだもの、韓国語スピーチ部門は韓国語の原稿(1,000字以内)を吹き込んだもの、日本語エッセイ部門は日本語の原稿(1,000字以内、韓国語の単語を一つ以上入れる)を提出。
応募者数	494名(韓国語スキット部門115組230名、韓国語スピーチ部門65名、日本語エッセイ部門199名)
第1次選考	39名(韓国語スキット部門12組24名、韓国語スピーチ部

	門7名、日本語エッセイ部門8名)が通過。
第2次選考	2008年6月14日(土)、千代田放送会館(東京)各部門とも、原稿か台本を暗記し、口頭で発表。発表後、審査委員の韓国語または日本語による質問に答えた。
審査委員	梅田博之(麗澤大学前学長)、イ・ユニ(東京成徳大学教授)、関川夏央(作家、神戸女学院大学客員教授)、姜信子(作家、恵泉女学園大学客員教授)[敬称略]
賞	最優秀賞:韓国語スピーチ部門・日本語エッセイ部門各1名、韓国語スキット部門1組(2名) 計4名 優秀賞:韓国語スピーチ部門・日本語エッセイ部門各2名、韓国語スキット部門は2組(4名) 計8名 特別賞:韓国語スピーチ部門・日本語エッセイ部門各1名、韓国語スキット部門1組(2名) 計4名 入賞者全員に韓国研修ツアー(7月28日～8月2日)、最優秀賞受賞者にはさらに、韓国の大学での韓国語研修(3週間)を副賞として授与した。